

ジュール・ヴェルヌにおける空想の都市

中島 廣子

大阪市立大学大学院文学研究科フランス言語文化教室

西欧的近代市民社会の形成に寄与したもののひとつが産業革命であり、それと連動する目覚ましい科学の進歩と技術革新は文学の世界にも大きな影響を及ぼし、「驚異の文学」と呼ばれるジャンルに新たな展望を与えることとなった。

フランス文学を例にとっても、ことに十九世紀の後半から、それらの成果を積極的に自己の作品に取り込む作家が現れはじめ、その代表と目されるのが、青少年むけの冒険小説や、サイエンス・フィクションの先駆けとなる作品を世に送り続けたジュール・ヴェルヌであった。たしかに、妖精物語から S.F. にいたる「驚異の文学」の系譜について論じたロジェ・カイヨワが、「妖精物語でも幻想小説でも、S.F.でも、それぞれの作品群に共通する一般的雰囲気や、特に好まれたテーマ、および基礎的着想等は、そのジャンルが花開いた時代の潜在的関心事から生じている」と述べているとおりである。¹ そこで、急速に近代化をとげてゆく時代の新しい世界観を反映した、現代にもつながる都市の概念の一端を、当時であっても先駆的だったこの作家の視点を通じて文化論的に考察してみたいと思うが、ヴェルヌの作品中に描かれた都市はおおよそ以下の四種類のパターンに分類できると言えよう。

第一には、同時代の現実の都市であるパリやロンドンを舞台にするケースである。それは『八十日間世界一周』（1873年）などの小説にみられるように、西洋近代文明の特色を非西洋圏の未開な側面と意識的に対照させつつ描き出すところにある。まず、主人公の世界一周旅行の出発点が、当時の近代都市の代表であったロンドンであることに注目したい。そこが何よりも、「市場経済」の中心地であると同時に、

¹ Caillois, Roger : *Obliques précédé de Images, images...*, Gallimard, 1987, p.46.

ジャーナリズムの発達による「情報社会」の中心地にもほかならないとみなされていたからだろう。そもそも、主人公フィリアス・フォッグが八十日で世界を一周してみせるという筋書きに、同じ頃にロンドンで起こった都市型犯罪である巨額の銀行強盗事件がからみ、腕利きの刑事が彼を犯人と間違っただけで旅の途中つきまとうという設定からして、ロンドンへの資本の集中という現実と切り離してはありえない。また、主人公自身もイギリスの裕福なブルジョワの一員として、実業界と金融業界の実力者たちが集まる「革新クラブ」に所属し、旅先で待ち受ける数々の困難を前にして、持ち前の超人的な勇気と冷静さに加えて、常に金銭による取引で解決をはかっていることを忘れてはならない。おまけに、フォッグの世界一周旅行に関する新聞報道いかんによって、競馬のように巨額の賭が行われ、「賭の証書が証券としての価値を生み、ただちにロンドンの株式市場に上場された。〈フィリアス・フォッグ株〉は現物取引またはオプション取引として盛んに売り買いされ、取引高は相当な金額にのぼった」とある。また、その後、八十日で世界一周するのは困難だとされる地理学会の論文が発表されると、価格は下落の一途をたどる。だが、ラストでの新聞報道にしたがって賭券の市場価値が変動し、魔法のように再び値を呼び始めたりするといった現象が見られる。以上のような様々なレベルにおいて、資本主義経済の原理とメディアの力に支配された近代都市の様相や市民社会の意識のありようが浮き彫りにされているのである。

これとは対照的に、主人公らが道中の要所要所で目撃するという形をとって、非西洋圏の未開な側面を強調した場面が次々と挿入されている。すなわち、ステレオタイプ化された異国趣味の風俗描写がそれである。たとえば、インドにおける異様なヒンズー教の儀式やサテイという人身御供の儀式、ついで日本の見せ物小屋での奇怪な天狗の曲芸の様子や、アメリカ・インディアンによる襲撃の場面などが格好の例としてあげられよう。そうした非西洋文明圏のただ中に、近代西洋文明が強力に浸透し支配する都市が点々と存在する。それらの地点を結ぶのが、輝かしい近代の「進歩」の結果を最もよく体現した汽船であり汽車の役割なのだ。これらを利用する行程の途切れた未開地では、象や橇という古い移動手段に頼らざるを得ないのが象徴的である。(図1・参照)したがって、小説の出発点がロンドンと設定され

たのは、先に述べた理由にくわえて、十九世における西洋列強の「植民地主義」の最先端を走っていた大英帝国の首都である必要性からくる事柄でもあったのだ。主人公に従僕として雇われた途端、世界一周の旅に供をする羽目になったパスパルトゥーが香港の町を見て、「この町は（自分が）が通ってきたボンベイやカルカットやシンガポールとほとんど変わらず、世界をぐるりと取り巻いてイギリスの都市が続いているような感じがした」との感想をもらすところがある。彼のこのせりふもまた、上記の事実を端的に言い表しているのではないか。また同じ観点にたてば、主人のフォッグがロンドンにおけると同様、香港でも「タイムズ」や「イラストレイテッド・ロンドン・ニュース」を読む場面が挿入されていることの意味に、気付くはずだ。さらに、彼らが太平洋を渡ってサンフランシスコに上陸したおりにも、アメリカ西部の都市を荒くれ男達が闊歩する場所だと期待していたのに、その予想が大きくはずれ、近代的な国際都市を見出すところがある。

パスパルトゥーは馬車の高い座席にのぼって腰をかけ、アメリカの大都市を興味深く眺めた。広い街路や、整然と並んだ低い家並みが見え、[...]町の通りには、沢山の馬車や乗合馬車、鉄道馬車などが走り、歩道は雑踏をきわめ、アメリカ人、ヨーロッパ人ばかりでなく、中国人やインディアンもまじっていた。要するに、それらの人々が20万人を越える人口を構成しているのだった。

パスパルトゥーは眼前の光景にすっかり驚いた。彼は1849年頃の伝説のサンフランシスコに行き着くのかと思っていたのに。つまり金塊を追って集まった盗賊や放火犯や暗殺者の町、あらゆる種類の無頼漢が、片手にピストル、片手にナイフをもって、砂金に賭けるとてつもない混沌の町にだ。しかし、「あのよき時代」はもう過ぎ去ってしまっていた。サンフランシスコは偉大な商業都市の様相を呈していた。[...]金鉱を求めて狂奔した連中がかぶったソンプレロや彼らが流行らせた赤シャツはもはや見当たらず、鳥の羽を頭にかざしたインディアンもいなかった。そこにあるのは、シルクハットと燕尾服を身につけた活気あふれる紳士達だった。

なかでもモンゴメリー街は、商業活動の極めて盛んな「ロンドンのリージェント街やパリのイタリア座前のブルヴァール、さてはニューヨークのブロードウェイにも匹敵」することが分かり、パスパルトゥーは「どうしてもイギリスを離れているとは思えなかった」と感じたのだ。この青年の独白こそ、まさしく当時の読者らが近代都市に対していただいていた判断基準の何たるかを、よく代弁していると言えよう。むろん作者は彼らの期待に答え、この後に続く大陸横断旅行のくだりには、おきまりの西部劇的シーンを用意しているのだが。

さて、『八十日間世界一周』において描かれた「市場経済」と「情報」の首都であり、「植民地主義」の帝都でもあるロンドンに対して、『征服者ロビュール』（1886年）という小説では、人工照明の発達のもとで、不夜城と化したパリの夜景が描写されているのである。不思議な飛行戦艦の「アホウドリ号」を発明したロビュールという人物は、それに乗って世界中を飛び回り、人々を驚愕させる。その飛行船がパリの上空にさしかかったのは夜間であった。第二帝政期における首都大改造の結果、「花の都」として変貌を遂げたパリが、眼下に「光の都」としてもその美しい姿を現したのである。ことに1889年のパリ万国博覧会の記念モニュメントとして建設されたエッフェル塔が、その巨大な照明灯でパリ全市を照らしている様子が描かれているのが印象的である。

「アホウドリ号」は「光り都」の上空に達したのである。その住民が寝ている寝なければならぬときでも、パリはその名のごとく、光の都だった。

〔…〕

エジソンの電球に明るく照らし出された並木道の上を、飛行船は進んだ。まだ通りを行き来している馬車の音や、パリに四方から集まるたくさんの路線を走る汽車の響きが、「アホウドリ号」まで昇ってきた。

〔…〕トロカデロ広場の二つの建物から、巨大な照明灯でパリ全市を照らすエッフェル塔まで、飛行船は軽やかに飛んだ。（図2・参照）

ガス灯にはじまり、アーク灯から白熱灯へと次々と改良されていった人工照明の

飛躍的な発達による闇の征服こそ、近代化の何よりの証であり、都市の魅力をいやがうえにも高め、夜の都会生活という新しいライフ・スタイルを生み出したことは周知の事柄である。² それはヴェルヌの様々な作品に描かれた熱帯のジャングルなどの、未開地における漆黒の闇の世界と好対照をなすものである。そして、こうした人工照明に対する強い執着が、彼の生涯にわたる作品中で「都市」と関連して必ずといっていいほど顔をのぞかせている事実を強調しておきたい。

次に、ヴェルヌが描いた二つ目のタイプの都市についてふれてみよう。それは、西洋近代都市のうちでも、彼が青年時代を送ったパリや、その後の生活拠点となったアミアンの近未来像を描くケースであり、そこでは近代化の「光」と「陰」の両面が予見されている。『二十世紀のパリ』(推定 1863 年)はヴェルヌが作家としてデビューした頃の頃に書かれたものだが、日の目を見ることなく未公開のまま忘れ去られていて、近年、遺族の手で発見され大いに話題を呼んだ小説である。この小説は何よりもまず「教育問題」に関する話から始まる。それは恐らく、当時のフランス社会にとって、極めて重要な関心事だったからだと思われる。というのも、普通教育が普及した十九世紀では、特にその後半において、子供への関心が急激に高まり、新しい時代にふさわしい知識を修得させようという傾向がみられたことによる。³ ただし、小説中の未来社会では、オスマンによるパリ改造の際に顕著な例をみた、「土地投機」と「金融」の結びつきをもじって、それを「教育」にも当ては

² ヴォルフガング・シヴェルプシュ『闇をひらく光』 19世紀における照明の歴史(小川さくえ訳、法政大学出版局、1988年)参照。

なお、ヴェルヌの作品における「人工照明」の問題に関しては、拙著『「驚異」の樂園 フランス世紀末文学の一断面』(国書刊行会、1997年)でより詳しく論じている。

³ こうした機運に乗って成功したのがエッツェルであり、ヴェルヌらと執筆契約を結んで『教育と娯楽誌』を発行していた。

また、当時の「子供」を取り巻く状況については、私市保彦「夢想家ヴェルヌ」(ユリイカ 5『特集 ジュール・ヴェルヌ』、1977年、90-91頁)を参照のこと。

新しい知識の普及という観点からは Compère, Daniel : *Jules Verne, écrivain*, Droz, 1991, p.21.あるいは Mollier, Jean-Yves : *Diffuser les connaissances au XIX^e siècle, un exercicedélicat, Romantisme* 108, 2000, pp.91-101.においても言及されている。

さらに、学校問題については、作家のエミール・ゾラも評論を行っており、一般の関心の高さがしのばれよう。(エミール・ゾラ『時代を読む 1870-1900』、<ゾラ・セレクション> 第10巻、小倉孝誠・菅野賢治編訳、藤原書店、2002年)

めている。つまり、「十九世紀にパリを一新させた、不動産会社、不動産開発銀行、不動産銀行の例にならぬ」、「教育」は「金融」とが結びつき、「教育金融会社(Société Générale de Crédit instructionnel)」というところに任され、営利企業である株式会社の形態をとり、取締役会には学者も教授も入っていないのである。つまり、「教育は実業家の利益になる、ビジネス」にほかならず、文芸は軽視され、古典語教師も姿を消し、学校経営に関わる株主総会で文学講座が1962年に廃止される憂き目にあうとされている。おかげで、フランス学士院には文学者がわずか一名しか残っていない状況の下、主人公のミッシェルは学校のラテン語作詩部門で一等賞をとり、同級生の失笑を買うのである。ところで、この青年はすでに両親を亡くしており、叔父の銀行家で「パリ地下会社」の社長の世話になっている。その叔父にかかると、「音楽は機関車の汽笛でいいのだし、文学は証券取引所の日報で事足りる」という。「今の世の中はもはや巨大な市場でしかない」と考える新時代の精神を反映した実利主義者のこうした人物こそ、社会的成功者となる。そして、叔父とは相容れない詩人の魂をもった主人公は、学校を出ると、叔父が経営する銀行で働かねばならなくなる。そこで、「教育」すらも支配するにいたった市場経済の象徴的存在として、金融機関の内部が詳しく描かれることになる。たとえば、問題の叔父の銀行には巨大計算機と自動防犯金庫が備えられていて、有価証券の価格が電信網を通じ、刻々、世界各地の証券取引所の電光掲示板に表示されるのである。今日のファックスを思わせる電送写真機も利用されており、機械が人間にとってかわり、もはや「行員など歯車のひとつ」にしかすぎなくなっている。以上のようにこの作品では、高度に科学技術が発達し、実利主義的な価値観が幅を利かせ、美や芸術が軽視されるといった風潮が支配する近未来像が提示されており、ヴェルヌが「文明社会の危機」を早い段階から予知していたことがうかがえよう。ただその反面、二十世紀のパリには、前世紀以来の交通機関の急速な発達の結果、高架鉄道やガス自動車が走り、町中がまばゆく輝く人工照明に照らされていると予想している。そして、作者がこの作品を書いた当時になされていたパリの都市改造という一大事業が世の関心の的となっていて、作品にもそれが強く表れていることは先にも述べたとおりだが、本来的な「都市の整備」という問題からも多くの要素が反映されていることは言うま

でもない。

我々の祖先の誰かが次のような光景を目の当たりにしたなら、何と言っただろう。つまり、太陽の光にも匹敵する眩い光で照らされた大通りとか、アスファルト舗装で吸音された道路の上を静かに走る幾千もの車や、宮殿さながらに白く明かりを放つ豪華な店々、広場ほど幅のある交通路、野原のように広大な広場、あるいは二万人の旅行客が贅沢に泊まっている大きなホテルの数々、軽やかにかかる高架橋、長くのびる優美なアーケード街、道路から道路へと架かる空中連絡路、おまけに驚異的なスピードで空中を縦横に走りぬける列車といったものを。(図3. 参照)

中でも、広い舗装道路の整備という近代都市の要件が忘れることなく満たされているのが、上記の引用文中で確認出来るだろう。

以上のような、近代社会における諸々の進歩と発展がもたらした明るい側面と、その行き着く果てにある限界と危険性を予知した悲観主義的な側面という、近代化がはらむ相反する二面性にたいする意識が、その後の彼の著作に繰り返しあらわれてくることになる。この観点から『空想の都市』についても見てゆこう。これは小説ではなく、1875年12月にヴェルヌ自身が住むアミアン市のアカデミーで、公式の演説にかわるものとして、その都市の未来像について述べた話である。アミアン市は製糖業で繁栄した北仏ピカルディー地方の中心地であり、「夢物語」というフィクションに託して、彼がその当時の同市の有りようを批判しようとしたものだとされている。すなわちヴェルヌ自身が、夜、眠っている間に見た夢の中で、西暦2000年のアミアン市内を散策し、目の当たりにした情景について、聴衆に語って聞かせるという形をとっている。ただし、『二十世紀のパリ』の中で取り上げられていたエピソードが再度出てくる箇所もかなりある。一例をあげれば、やはりここでも交通機関について語られ、トラムウエーが走る町中は人工照明で明るく照らされている。そして、十九世紀以来、それも特に世紀末に向かって関心の高まる、「衛生」観念や「健康」志向にもとづいた内容のものが認められるが、この問題につい

ては後に述べることにする。むしろ特筆すべきは、『二十世紀のパリ』においても記されていた「少子化問題」にふれられていることで、独身者には税を課すべきだという意見とか、授乳マシーンが登場する場面まで出てきて、人類の進歩の果ての^{デカダンス}衰退にも話が及んでいる。(図4・参照)これは、十九世紀の後半になって出生率の低下が顕著となり、国力維持の観点ともからんで、大きな問題になってきていたからだろう。⁴ さらに、科学技術の進歩のおかげで、現在の衛星中継による世界同時コンサートを思わせる、電気同時コンサートまで想定されている点も付け加えておきたい。

ヴェルヌが描いた都市のうちで、第三のケースは、当時の西洋文明の中心地から遠く隔たった地点に出現した架空の都市で、ここでは科学の驚異に基づく完全な人工都市の「理想」と「悲劇」が提示されている。まず、『黒いインド』(1877年)という小説は、スコットランドの廃坑となった炭坑で新たな鉱脈が発見され、その資源をもとに築かれた人工の地下都市「コール・シティー」が舞台となっている。その炭坑で採れた石炭を電気エネルギーに変換し照明や暖房に利用するといった、近代的設備の完備された理想の都市の姿が描かれている。ここでも『征服者ロビュール』におけると同様、照明技術の発達によって漆黒の闇を征服することや、人工的に暑さ寒さなどの自然の過酷な条件をいかにコントロールして快適な生活空間を確保するかという、十九世紀的な願望の表れが読みとりうるのである。おかげで、この近代的な理想郷が「観光」の対象となり、水力で動く列車に乗って各地から観光客が押し寄せてくることになる。もちろん、「観光」もまた、作品が書かれた時代の流行現象となっていたことをも言い添えておこう。

コール・シティーに到着した観光客は、暖房や照明の手段として電気が最も重要な役割をはたしている環境に身を置くことになる。

[...] 暗いはずのこんな場所なのに、あまたの丸い電光盤が太陽のそれに取っ

⁴ 後にゾラも、同様の観点から、「人口の減少」について『フィガロ紙』に寄稿しており、大きな社会問題となっていたことがうかがえる。(ゾラ 前出書)

て代わり、強烈な明かりが降り注いでいた。アーチ型天井の内輪からぶら下げられたり、天然の石の支柱に吊されたりしたそれらの電光盤が、いずれも電磁器機から生じる直流の電流の供給を受け、かたや太陽のように、かたや星のようにその一帯を広く照らしていた。いったん休息の時間がやってくれば、スイッチを切るだけで、底深いこの炭坑に人工的に夜の帳をおろさせるには事足りた。

〔…〕

おまけに、毎日曜日には、炭坑の中の散策や、(地下の)湖や池への遠足なども、同じくらい楽しい娯楽となっていた。

さらにこの人工都市は単なる観光地であるにとどまらず、あたかも万国博覧会の会場のごとく、近代的「祝祭空間」としても機能するようになる。

またしばしば、マルコーム湖のほとりでバグパイプの音が響き渡るのが聞かれた。スコットランド人達は彼らの国民的楽器の呼びかけに駆けつけて来て、踊りを踊るのであった。そんな日には、スコットランド高地の民族衣装を身につけたジャック・ライアンが祭りの王様となるのだった。

その結果、ついにコール・シティーは、スコットランドの首都と張り合うほどの繁栄ぶりを謳歌するにいたるのである。

次に、『ベガンの五十億の遺産』(1879年)を取り上げてみよう。この作品では、インド王妃の莫大な遺産を相続した二人の科学者、シュルツ博士とサラザン博士が、それぞれ対照的な性格をもつ近代的な人工都市を、アメリカ西部のオレゴン州の未開拓地に、「まるで魔法のように」突如として建設するという設定のもとに筋が展開する。シュルツ博士は世界を支配せんとの野望から「鋼鉄都市」をつくり、ライバル視している「フランス市」の壊滅をもくろむのである。彼は豊富な埋蔵量を誇る鉄と石炭を資源にして、世界最大の製鉄業者となり、40キロ離れた地点まで届く最新鋭の巨大な砲弾製造に取り組む。

巨大な資本のおかげで、怪物じみた施設、本物の都市であり同時に模範的な工場でもあるものが、まるで魔法の杖の一振りによって、地上に出現したかのようだった。(図5 . 参照)

シュルツ博士の専制支配のもと、厳しい規律と完全な秘密主義の支配する「鋼鉄都市」は、秒単位の正確なチームワークのもとにベルト・コンベアー方式で作業させられる巨大な兵器工場でもあり、その真ん中に「牡牛の塔」がそびえている。この塔は、「いかなる火災の危険からも守られ内部を小型鉄甲艦の表面のように鋼板で補強され、機関銃の銃眼つきの鋼鉄の扉のシステムで開閉され、〔…〕夜間にはずらりと取り付けられた照明があてられ、訓練された歩哨に固められる」といった、強固な砦の様相を呈しているものだ。ところが「牡牛の塔」の内部に一步踏みいると、十九世紀のヨーロッパ人にとっての夢の空間であった巨大な温室がひろがっていた。⁵(図6 . 参照)「地下熱を利用し金属パイプを通して室温をが保たれ」、青空の下、熱帯植物が生い茂り、スズメバチや極楽鳥が飛び交う「楽園」の様相を呈していたのである。そして、その地下にシュルツの豪華なサロンと秘密の執務室があった。つまり『黒いインド』においても描かれていたような、自然の過酷な条件からまぬがれた快適さの追求という近代都市の課題が、ここにおいても見出せるのである。ただし、「鋼鉄都市」では、それを富と強権による独占という構図のもとに実現しただけのことなのだ。

いっぽうの「フランス市」は、サラザン博士の提唱に基づく、芸術・文化も重視された理想郷として描かれている。そこでは専制支配の「鋼鉄都市」とは反対に、電話による公民会議が実施されているほど民主的に運営された真の市民社会が実現されている。つまり、この都市の何よりの特色は快適さの民主的享受とでも言うべきもので、そうした目的のための強迫観念に近いまでの「衛生」重視と「健康」志向を貫いている。十九世紀におけるパリの都市改造が、町なかの大気の流れや日当たりをよくし、伝染病を防ぎたいとの悲願から出てきた側面もあることを思い出

⁵ シュテファン・コッペルカム『人工楽園 19世紀の温室とウィンターガーデン』(堀内正昭訳、鹿島出版会、1991年)を参照。また、この点に関しても、上記の拙著でさらに詳し

すべきだろう。「フランス市」の市民は日照や通風の点で他人に損害を与えてはならず、公衆衛生に十分な配慮をし、「疫病の巣であり毒素の温床」となる「アパルトマンにおける絨毯と壁紙の禁止」が徹底され、清潔さを保ち通風を心がけ、暖房の排気は集中処理ののち放せねばならないという、大気汚染対策までほどこされている。さらにクリーニング店は、高床の建物で蒸気機械と人工乾燥機および消毒室をそなえていなければならないとされている。とにかく、誰もが清掃と洗濯を第一に心がけ、公共建築は豪華で衛生的配慮がなされ、衛生警察の組織もある。そして、こうした努力の結果による、極端な死亡率の低下についてもふれられている。⁶ そのいっぽうで、「住居や肉体をあまりに多くの衛生思想でがんじがらめにする必要はない」とも書かれているのである。

この「フランス市」の民主的な都市のイメージと対立する例を、ここでもうひとつ紹介しておこう。すなわち、上述の『ベガンの五十億の遺産』における「鋼鉄都市」と極めて類似した、『バルッサック調査団の驚くべき冒険』（1919年）に描かれた「ブラックランド」である。これは、アフリカ大陸のサハラ砂漠の南西を横切るニジェール川沿いの地点、ガオの近くの地図には載っていない都市で、ハリー・キラという極悪人が、ロンドンで銀行強盗を企て強奪した巨額の金をもとに造った、半円形をした町である。そこでは専制君主のキラのもとに階級社会が形成され、それぞれの階級の住む区画は厳重に仕切られている。だが、その独裁者に支配される都市においても、近代都市である以上は、完全に清潔さが保たれ電話も完備され、たとえ奴隷の小屋でも水道や電気が完備されている点に注目すべきであろう。

最後に、ヴェルヌによる都市像の第四のパターンについて述べることにしよう。この作家は、一般的な都市の概念とは異なった独自の発想として、巨大な船を都市にみたくて試みを『浮かぶ都市』（1871年）でなしている。ヴェルヌはロワール河の河口に近い港町ナントの生まれだが、そこはかつて奴隷貿易でにぎわった貿易港

く論じている。

⁶ *Revue Jules Verne* 7(1^{er} semestre 1999.)において、「フランス市」における「衛生思想」のもとになった資料についての論考が述べられている。(Della Riva, Piero Gondolo :De qui est « France-ville »?, pp.43-47.)

だった時代もあり、少年時代の彼に海に対する憧れや船への興味を覚えさせたと言われている。また作家生活を送るようになってからは、自ら船を所有し書齋がわりにもしたようだ。ただし、彼の生きた時代には、船よりむしろ鉄道が近代的な交通手段となりつつあった。にもかかわらず、彼自身は船というものにこだわり続けたと言われる。ようするに、こうした嗜好が彼をしてこの種の作品を書かせたのだろう。⁷ さて、作品の舞台として選ばれたのは、作者が実際にアメリカへの旅で乗船したことのある「グレート・イースタン号」という外輪とスクリューを併用した鉄の巨大船で、海の怪物「リヴァイアサン」と呼ばれていたものである。(図7・参照) 船体については、長さが200メートルを越えていたようで、「この汽船は造船技術の傑作なのだ。一隻の船という以上に、海に浮かぶ一つの都市であり、イギリスの土地を離れた一つの州が海洋を渡った後、アメリカ大陸につなぎ合わされようとしているのである」と作中に書かれている。この船は大西洋の電信用海底ケーブル敷設に使用された後、リヴァプール―ニュー・ヨーク間に就航したのだが、小説中では大海原という自然に対して、この船自体がヨーロッパとアメリカをつなぐ「文明のケーブル」としての役割を担っているように思われる。そして、数千人から一万人ほど収容できるほどの巨大船は、まさしくひとつの都市にも等しく、その船上での多彩な人間の織りなすドラマは、現実の陸地における都市のそれと変わるところがない。

もしグレート・イースタン号が、単に航海するだけの機械でないなら、もし一つの小宇宙であり、一つの社会をのせて運んでゆくのなら、ある一人の観察者がより大きな舞台におけるように、人々のあらゆる本能や愚かしさや情熱の数々をそこで見かけたとしても、驚くにはあたるまい。

では、いったい作者はこの船のどのような点に、都市としての機能を見出しているのだろうか。まず、十九世紀の都市生活者にとっての大きな楽しみの一つが、町

⁷ Noiray, Jacques : *Le Romancier et la Machine II*, Corti, 1982. 参照のこと。ヴェルヌは敷かれたレールの上を走る、車窓からの眺めの単調な鉄道の旅は、さして好んだわけではなか

をそぞろ歩きすることにあつた事実とかかわってこよう。すなわち、動詞の *flâner* や名詞の *flânerie*、*flâneur* といった一連の単語に表れている、路上観察者の「フラヌールの文化」とも呼びうるものである。本文中でも、語り手が乗船一番に試みたことがそれであり、「この巨大な蟻塚のことごとくの穴を訪ねてみよう」と決心して、観光客がどこか知らない町を歩き回るように散策し始めた」とある。「船尾の甲板上に長々と続く船室に私は体をくっつけるようにして歩いた。これらの船室と舷側との間に、どちらの側にも二本の幅広い通路がのびており」、語り手はそれをブルヴァールと呼び、そこには所狭しと群衆があふれていた。ことに天気の良い日には、「ハイド・パークやチュイルリー公園さながらの光景、フランスの遊歩道にいるような気分」になったという。こうした都市の風景に欠かせないのが、道行く人々の最新流行の服装だろう。第二帝政期にはすでに今日に続くオート・クチュールの形態がもてはやされ、毎年の「モード」の行方が大きな話題となる時代になっていたからだ。この船内でも、婦人客の「モード」が観察され、その本質がみごと定義される場面が出てくる。

美しく晴れた日には、大陸では原野を緑に蘇らせる太陽が、ここではあざやかな身繕いに花を咲かせるのだった。草木は時として遅れるが、モードが遅れることは絶対がない。やがてブルヴァールには散歩者の群がいくつも数えられるようになった。五月の明るい日差しのもと、とある日曜日のシャンゼリゼそのままに。

さらに、十九世紀の「都市のレジャー」として、競馬が楽しめるようになるが、船上でも同様の催しがなされいる。水夫を競馬の馬にたとえたマラソン・レースで、本物の競馬同様に勝敗をめぐる賭けが行われるのである。こうした昼間の楽しみに加えて、「夜のレジャー」も欠かせない要素として存在する。じっさい、「煌々と明かりに照らされたサロンは、大海原の深い闇と対照的で」あり、スモーキング・ルームについても、「それはまさしくこの洋上都市の酒場であり...見事なカフェで

ったのではないかと考えている。

ある」と記されている。レストランで供される食事をめぐってもくわしい記述がなく、**「パリの中心の大通りにあるレストランにいるような気分」**になったとある。大サロンでは音楽の演奏や道化師によるショーなどのアトラクションがあり、日曜の朝にはミサが挙げられるのである。なお、都会の魅力にはこうした明るく光の当たる部分だけでなく、妖しく神秘的な部分もなくてはならない。その点、この巨大船にも**「迷路」**のごとき印象を語り手にあたえる所があり、**「私はこの海上都市をくまなく見て回っていたと思ったので、ここよりもっと奥まった<界限>がほかにあることを知らなかった」**と思わずもらしたり、**「ある船客は船の奥深くで道を見失い、〔…〕二度と見つからなかった」**といった旅慣れた乗客のほら話も紹介されている。くわえて、亡霊のように夜のデッキに出没する謎の黒衣の婦人客の居場所を彼らが探索するといった、推理小説さながらの場面も用意されている。そして作品の終わりのほうで、この巨大船の人工的な空間と、語り手がアメリカに上陸して見物するナイアガラ瀑布のダイナミックな自然との対比が、ひとつの見所となっているのである。

ここまで述べてきた近代都市の理想像を、極端なまでに押し進めたのが『スクリュュー島』(1895年)である。この島は鋼鉄製で楕円形(長さ7キロ、幅5キロ、周囲18キロ)をしており、高さ16.6メートル縦横10メートルの箱7万個をボルトやリベットで締め合わせて作られている。(図8 参照)面積は27万平方キロあり、何から何まで人工で出来ており、十万馬力のスクリュューで走る島である。「造船技術の傑作」であり、「太平洋の宝石」との名をほしいままにし、「北緯35度と南緯35度の間」の太平洋上に浮かぶ美しい常夏の島々をぬうように移動してゆく「人工楽園」である。その島の首都はミリアード(十億)市という名の、極めて裕福な金持ち達が住む自由都市であった。首都の大通りには高速電車が走り、動く歩道もあり、道路の路面は「ゴムの木やマホガニーの非腐食性の板で覆われ」、清潔そのものだった。各住宅には電力や暖房、圧縮空気、水道などを市が供給し、ここでもあらゆる細菌の影響を防ぐ工夫がなされている。空からは必要な時には人工雨が降り注ぎ、電気照明の人工の月が真昼のような光りを投げかけている。(図9 参照)そして、島内の二つの工場で作られる電気が、島の移動手段以外のあらゆる

用途にも使用されている。また、大海原に孤立する島でありながらも、近代都市らしく「メディア社会」であり、毎朝新しいニュースが電送されてくるようになっており、模写写真・電送写真を使用し、劇場電話によってコンサートの模様をアメリカやヨーロッパ大陸へも同時中継するのである。音楽の健康促進効果に着目し、音楽局が各家庭に音波を伝達するいっぽう、たばこの煙を各家庭に供給するといった記述もみうけられる。とにかく、すべてが最新式の設備によって「機械化」され、洗面・入浴から、香水噴霧、整髪、靴磨きにいたるまで自動的にすませられる。⁸ (図10. 参照) なお教育に関しては、無償の義務教育がほどこされ、古語や現代語、歴史、地理、科学、数学、芸術が旧世界のいかなる大学より、立派に教育されている。図書館ではソノシートでの朗読鑑賞を行っているのである。ところが、この動く「人工楽園」にも危機が訪れる。なぜなら、産業が追放されているこの島を、巨大な工場や商業の場に変えようとする動きがあり、ついにミリアード市を二分する抗争がおこり、島がばらばらに分解されて破壊されるにいたるのである。

なお、美的な観点からすると、これら大海原をゆく船のイメージと都市とを結びつけた、「移動する都市」の例には、動的で移ろいやすい美を好む近代的美意識の現れが端的に読みとれよう。たとえば、『浮かぶ都市』では、刻々と移動する位置が船のサロンに張りだされ、その掲示を記した箇所だけでも小説のかなりの部分を占め、目的地に着くことより、むしろ移動する事の方を楽しむ傾向がみられる。この点では、『八十日間世界一周』などの他の作品でも同じことが言え、その典型例としてフォッグは旅行の途中の中継地で見物などしたためしがないのである。また、『スクリュウ島』では『浮かぶ都市』におけると同様、モードについてもふれてあ

⁸ ヴェルヌと息子のミッシェルの共作 *Au XXIXe siècle. La journée d'un journaliste américain en 2889*. でも、同様に、技術革新が進んだ社会の様子が予想されている。

図版については、Robida, Albert : *Le Vingtième siècle*, Georges Decaux, 1883. 参照。

Jules Verne and his work (Twayne Publishers, 1966.) で Evance が、こうしたヴェルヌの発想について、戯画家ロビダの影響があるのではないかと推測しているが、この研究書が書かれた時期には目にする事の出来なかったヴェルヌの『二十世紀のパリ』ですでに、同様の発想が見受けられる点や同時期に創作活動を行ったヴィリエ・ド・リラダンのある種の作品中にも見られるものでもある。ちなみに Herp, Jacques Van : *Panorama de la Science-fiction* (Lefrancq, 1996) では、ロビダのことを「鉛筆のヴェルヌ」と呼んでいて、二人の気質に極めて近いものがあることを示唆している。

り、パリの洋裁店のお得意であった裕福な女性達は、「その年その年の流行を追い」、ほとんどが「パリ製のものでなければ、布地や化粧品は受け付けなかった」とある。この「モード」という現象も、絶えざる変化がその本質であることはいうまでもなく、先に指摘した事柄と相通ずる感性の産物であり、ヴェルヌがわざわざ取り上げずにはすまなかった理由が理解できよう。

以上、ジュール・ヴェルヌの諸作品に描かれた都市像の四通りのパターンについて述べてきたが、いずれの場合でも科学技術の進歩による近代都市の人工性が強調されていて、特に第二のケース以下では、都市が一種の「機械」のごときイメージを呈しており、十九世紀半ばより回を重ねた万国博覧会の展示物を連想させる面がある。すなわち、両者とも想像力の産物にすぎなかったものが、いつの間にか現実世界に登場しうる時代の所産だからだ。しかし、そのような時代には、いかに新しい「驚異」の種であれ、いずれ現実には追いつかれ追い越され、たちまち古びてしまう危険性をはらんでいることになる。ヴェルヌの文学的想像力から生みだされた空想の都市が、物語の最後には消滅する結果に終わることが多いのも、恐らくはそのためであろうと思われる。また同時に、『八十日間世界一周』にまつわるエピソードとして、フクシオンと現実の逆転現象が起こったことも思い出すべきだろう。つまり、物語中の旅は明らかに架空の事柄であるのに、ヴェルヌが新聞に小説を連載し評判をとると、主人公の旅に自分の会社の客船を使わせてほしいという申し込みがあったのだ。このように、ヴェルヌが創作に励んだ時代には、現実とフィクションの相互乗り入れ的な現象が見られるようになっていたと言えるのではないか。いずれにせよ、こうした都市観を通じて、ヴェルヌが生きた時代同様、変化の時代である現代において、「夢を紡ぎ出す」という文学の機能を再認識してよいのではないだろうか。

使用テキスト：以下に記すものを除き、すべて「*Livre de poche*」版使用。

Une Ville flottante Hachette « Collection Hetzel »版。

L'Île à hélice Hachette « Collection Hetzel »版。

Paris au XX^e siècle Hachette, 1994.

Une Ville idéale Édition CDJV-La Maison de Jules Verne, 1999.